



（大正期・青森県史編さん資料より）

鯉ヶ沢での大羽鰯の水揚げ（大正期・青森県史編さん資料より）

は、弘前藩の史料に見え、藩庁への献上品として名前が挙げられた魚介類を取り上げて、江戸時代の水産業の一端をうかがってみたい。まず、その

意味を有していたのである。そこで今回は、弘前藩の史料に見え、藩庁への献上品として名前が挙げられた魚介類を取り上げて、江戸時代の水産業の一端をうかがってみたい。まず、その

漁師には褒美が与えられていた。そして、このようにして領内から集められたマダラはまず弘前城に運ばれ、家老や用人など藩の上層部、時には藩主自身による検分を受けるといふ厳格な品定めを経て塩漬け等にされ、はるばる江戸へと送られていったのである。

このように献上品としての地位を確立していたマダラとサケに加え、江戸時代後期に至ると新たにブリの献上も史料に見えている。これは弘前藩が毎年秋に献上していたキジの捕獲量が落ち込んだため、それに替わる国産品を模索した結果として始まったようだ。

三方を海に囲まれ、中央に大型の内湾である陸奥湾を抱える青森県は、暖流と寒流が沖合でぶつかり合う場所に位置していることから、暖流にのって北上してくるマグロやブリ、寒流にのって南下してくるサケやマダラなど、多くの魚が集まる豊かな海に恵まれた、

全国でも有数の水産県として知られている。江戸時代に現在の青森県内に存在した諸藩にとっても、水産業は重要な産業の一つとして認識されていたほか、領内で漁獲された特色ある水産物は、幕府をはじめとした各所への贈答品となるなど、非常に重要な意味を有していたのである。

江戸時代には大口魚とも呼ばれたマダラは、弘前藩から幕府への毎年の献上品となっており、一番物から三番物までを藩庁に届けた

ついで、幕府等への献上品として重要であったのは、弘前藩領内を流れる川に遡上するサケであり、こちらも一番物から三番物までを届けた漁師には褒美が与えられ、藩主自身による検分等を経て各所へと配られていた。さらに、たとえ領内の川で漁獲されたサケであっても、その川の川筋が南部領を通過しているという理由から献上品とされなかった事例もあり、献上品となるサケには、その出身の川にも条件があつたようである。

殿様に御目見した魚たち  
—献上された魚介類—

石塚雄士

（県民生活文化課）

（県史編さんグループ）

ただ、一つ不思議なことには、ここには津軽の春の観桜会における定番の魚介類であるトゲケリガニ（毛ガニ）やガサエビ（シヤコ）の名前が挙がっていない。これは当時、献上させるだけの漁獲がなかったのか、献上するには不都合があつたのか、いずれにしても少々興味深いことであるように思われる。